第１９回ヨーロッパ日本語教師会シンポジウムジョイントセッション
第２回日本語学研究会　フランス語母語話者の日本語学習における誤用の分析
Deuxième Journée de linguistique japonaise en pré-ouverture du 19ème Symposium sur l'enseignement du japonais en Europe « Analyse des erreurs commises par les étudiants français »
Mercredi 26 août 2015, à 14 h, Université Bordeaux Montaigne

引用構文にかかわる誤用の分析

デロワ中村弥生（フランス国立東洋言語文化大学、日本学研究センター）
大室（伊藤）文（East West japanese Language School）

０．はじめに

我々は、現在イナルコ日本学研究センター（CEJ）におけるプロジェクトの枠組みで引用構文にかかわる一連の誤用研究を行っている。2014 年 10 月の勉強会では「引用助詞「と」に関わる誤用」というタイトルで発表を行い、2012/2013 年度に中村が行った実験に関する報告を行った。今回は、少しテーマを広げ、引用構文全体、特に「と」引用節の内部構造に焦点をあてた研究報告を行う。まず、第１節で 10 月勉強会での発表内容を簡単に振り返り、第２節で中心テーマである引用節の内部構造に関して行った記述的な研究の紹介する。第３節では、2012/2013 年に伊藤が行った実験に関する報告し、最後にまとめを今後の展望を述べる。

１．引用助詞「と」に関わる誤用（中村 2014）

引用節は初級の比較的早い段階から「言う」「思う」の補足成分として導入される。この時フランス母語学習者が自発的にあるいは外的情報から関連づけると考えられるフランス語表現は、構文コネクタ « Que » により形成される補足節（Complétive）である。

(1)　Le Premier ministre a dit **qu**'il partirait pour les États-Unis le mois prochain

(2)　首相は、来月アメリカへ発つと言った。

しかしながら、わずかな対照言語学的分析からもこれらが似て非なるものであることは明らかである。特にフランス語で補足節が発話・思考動詞と用いられた場合、補足節は機能的に直接目的語であり、直接目的語を代行する代名詞 « le » への置き換えが可能である。

(3)　Le Premier ministre **l'**a dit.（首相はそう言った。）

(4)　Il a dit des bêtises.（彼は馬鹿なことを言った。）

(5)　Il **l'**a dit.（彼はそれを言った。）

これに対し、日本語の「と」引用節は直接目的語であるとは考えにくい。それは、上のフランス語の対訳として示された日本語文を見ても明らかであろう。さらに、日本語では引用節は、ヲ格補語と共起することが可能なこともその裏付けと言える。

(6)　「よう来てくださいました」**と**　感謝の言葉**を**　述べた。

ここで引用節は述語である発話動詞「述べる」の内容を示しており、ヲ格補語は内容の種類を示すラベル名詞（森山 1988）である。これが江口（1998）が同格構造と呼ぶ対象が二重に

示された構造であり、日本語引用節構造の特徴の一つである。他にも、日本語ではプロトタイプ的な発話・思考の動詞以外にも様々な動詞が引用節と共起し、補足成分だけでなく付加的成分も形成する。

(7)　「本気でゴルフをやってみよう」と　沖学園中へ進学した。

これに対し、フランス語では Que により形成される補足節と共起できる述語には大きな制限があり、ごく限られた動詞のみ使用が可能である。このように二カ国語間の引用表現体系に大きな違いがあることから、我々はフランス母語学習者の引用助詞「と」の習得において母語干渉が確認されるのではないかと考えた。そこで、様々なレベルの学習者および日本語母語話者に対し引用助詞「と」の使用に関わる調査を行い、両者の間にどのような違いが見られるか分析を行ったうえで、学習者の母語と学習言語における体系の隔たりが習得に及ぼす影響を検証することにした。



図１　調査に使用する絵（左から質問１、２、３）

調査では、図１の絵を見せながら「日本語ではどんな挨拶をしますか。」（質問１）「何がかいてありますか。」（質問２）「パラソルに何かかいてありますか。」（質問３）といった質問、「フランス人はクリスマスカードに何をかきますか。」という質問に答えてもらう誘引タスクを用いた。

(8)　（質問１への回答例）*おはようございます　を　言います。

(9)　（質問１への回答例）*おやすみなさい　を　言います。

(10)（質問２への回答例）*「国語」　が　書いてあります。

(11)（質問２への回答例）*「自由」　が　書いてあります。

(12)（質問３への回答例）*「Figaro」　が　書いてあります。

(13)（質問４への回答例）*「Joyeux Noël」　を　書きます。

上にあげた例のように、実験結果からは、予想通り「と引用節」と「を格・が格補語」との混同が見られたため、引用節とこれら格成分との本質的な文法的違いを早い段階から明確に学習者に示す必要性があるのではないかという提案を行った。また、同様の調査を母語話者を対象にしても行ったが、その実験結果を分析すると学習者との違いが様々な点で浮き彫りとなった。まず質問１では、「どんな挨拶をしますか。」という問いに対する答えで、学習者は「と言います」以外の形式がほぼ見られなかったのに対し、母語話者は「と挨拶します」「という挨拶をします」「というふうに挨拶します」というバリエーションが見られた。質問

２の「何がかいてありますか。」という問いに対しては、学習者は表紙のタイトルや出版社名などを一つ一つ読んでいったのに対し、母語話者は全員、書かれている内容そのものではなくそれを抽象化した一般名詞である絵、出版社、漢字といった語を用いて「タイトルが書いてあります。」というように答えた。同様に質問３の「何かかいてありますか。」という問いに対しても、２名の母語話者は「フランス語／文字が書かれています。」という形で答えた。この実験結果から、母語話者が「何がかかれていますか」という質問が求めている答えと認識しているのは、内容そのものではなく抽象化されたラベル名詞であると考えられる。このことから母語話者にとっては「と引用節」と「を格・が格補語」の間には文法的な異なりとともに認知レベルでも何かはっきりとした違いがあることが分かった。

２．引用節の内部構造

引用構文は一般的にそのスタイルに応じて直接引用と間接引用に区分される。 砂川（2003）では、

> 直接引用というのは、もとの発話をそのままの表現として再現することである。そのときもとの発話の意味内容だけでなく、イントネーションやアクセントを模倣して再現することもあるし、話し癖や方言を再現することもある。また単なる叫びや笑い声のように、意味を伴わない音声も再現できるし、日本語のテキストの中に日本語以外の言語を引いてくる次のような例もある。

と定義されている。これに対し、

> 間接引用とは、もとの発話の内容を伝達の場を基軸にした調整を行った上で再現することである。
>
> 間接引用で再現するのは、もとの発話が表していると伝達者が解釈した命題とテンス形式、それに「発話の力」を表すモダリティ形式である。

とされる。間接話法による引用の生成については、奥津（1970）などが「間接化」として変形規則を提案している。

２．１．コーパス分析

では、実際の「と引用節」の内部はどのようなスタイルになっているのか。コーパスを用いてその実状を検証した。『 現代日本語書き言葉均衡コーパス』のサブコーパスであるコアコーパスを対象とし「と言う」「と思う」「と考える」を検索して分析を行った。今回はこの中から特に「と言う」の分析について報告する。「と言う」を含んだ３９４の用例を分析した結果、 引用節が丁寧体である例は約１０パーセントであった。

(14) 弁護士も「私からは連絡できるのですが」と言いながら、本人の住所を教えない。

(15) 最後に私のことを思い出してくれただけでも幸せです、と言ったそうです。

これらは 完全な直接引用の例であり、ダイクシスの操作が一切無く、終助詞や端折り、助詞の脱落など話し言葉・会話スタイルの特徴が多い。 主動詞は、具体的な発話行為でなければならなく、「と言われている」といった表現で直接引用は使用できないようである。これに対

し、残り９０パーセントを占める、引用節が普通体のケースは分析がより複雑になる。

(16) 私といっしょにいた人たちは、あのとき私は何日も何週間もじっと前を見つめて座っているだけだった、と言っている。

(17) そのときひとりの男が［…］はなはだていちょうに、イギリス領事館の事務所を教えてくれと言った。

(18) 哺乳動物のなかでも頭のいいクジラを殺すのは もってのほかだと言うわけです。

(19) 休んでも、昨日はあんたがいなくて大変だったよ、と言ってもらえるわけでもない。

まず、２２パーセントの７７用例にダイクシスが含まれる。例１６のようにダイクシスの操作が行われた間接引用はそのうちの１２パーセントのみとなっている。ダイクシスを含まない場合にも、文脈によって判断が可能な場合がある。例１７では、「はなはだ丁重に」という副詞の存在によりスタイルの変更が行われていることが分かり、間接引用と言える。しかし、例１８のようにほとんどの場合、判断は不可能と言える。また、例１９のようなダイクシスの操作が行われていないものでも、スタイルの変更があるかないかは分からず直接引用だという断言は難しい。 このように、間接化は奥津（1970）で定義されたようにすべての要素に関し同時に行われるわけではなく、引用節のスタイルは、直接引用と間接引用の二項対立というよりは引用される元の発話の発話者の様々な主観的要素の非主観化レベルによって段階的にとらえるべきものと考え、次のような仮説を提案する。

２．２．引用節内部の非主観化操作による非主観レベル

レベル０：太郎はじゃあ、これを赤く塗ってくださいと言った。／明日、私が伺いますねと伝えた。

レベル１： 太郎はこれを赤く塗ってくださいと言った。／明日 私が伺いますと伝えた。

レベル２： 太郎はこれを赤く塗ってくれと言った。／明日 私が行くと伝えた。

レベル３： 太郎はそれを赤く塗ってくれと言った。／翌日自分が行くと伝えた。

レベル４： 太郎はそれを赤く塗るように言った。／翌日自分が行くことを伝えた。

レベル５： 太郎は希望を言った。／予定を伝えた。

まずレベル０では、丁寧体の話し言葉そのままの形が引用節に現れる。レベル１では、文頭文末要素が消去された形で現れる。レベル２では、述語が普通体で現れる。元の発話も普通体であれば直接話法であるが、元の発話が丁寧体であれば、スタイルのみが変更された半間接話法となる。レベル３ではダイクシスを含む元の発話者の主観的要素の非主観化が完了し、間接話法となる。レベル４では、従属節内部は命題のみとなり、「発話の力」を示すモダリティーは従属節外部あるいはコネクターによって示される。レベル５では、最大限に抽象化されたラベル名詞のみが表出される。この研究はまだ初期段階であり、今回扱った以外の主観的要素の非主観化がおきているものと考えられ、特にレベル２に関してはより詳細な段階分けも可能かと思われる。ただとりあえず、今回、コーパス分析において、圧倒的にレベル２の用例が８７．５パーセントと非常に多かったことに注目したい。これは、さまざまな元の発話者の主観的要素の中でも丁寧体という元の聞き手に対する敬意の消去がかなり早い段階

でおこること、そして、ダイクシスの明確な非主観化はかなり遅くにしか現れないということを表していると言える。このような記述的研究をふまえ、学習者の発話の分析結果を見ていきたい。

３．2013 年に伊藤が実施した調査

３．１．調査の環境と方法

2013 年にフランスの大学で日本語を専攻する学生、１年生８名、２年生５名、３年生５名、修士課程１年５名の計２３名を対象として伊藤が行った調査について報告する。これらの学生の 使用教科書は『みんなの日本語』であり、２年弱で初級２冊（上下巻）を終了するプログラムである。また、 日本語母語話者４名を対象に同様の調査を行った。 調査手順としては、まず ビデオ（ＴＶコマーシャル「三井住友 VISA カード」図２参照）を視聴させ、父娘が何と言っていたかを独話で再現してもらう。このとき「お父さんと娘は何と言っていましたか」という形で質問する。

父と娘が湖の畔で焚き火の前に座っている
父：りなの将来の夢は何なの？
娘：パパみたいな建築家になること。
父：え。
娘：だってかっこいいじゃん。
（字幕）「satisfaction」
娘：パパの将来の夢は何？
父：え、だってパパはもう…。
（字幕）「satisfaction?」
父：夢かぁ、おーし。

図２　調査で使用したビデオのスクリプト

３．２．調査結果の分析と考察

	１年生	２年生	３年生	修士１年	母語話者
非調査者数	8	5	5	5	4
引用表現数	19	12	13	13	12
１人あたりの引用表現使用数	2.38	2.4	2.60	2.60	3

表１　調査結果

今回は調査結果に見る使用引用標識、ラベル名詞に関する誤用、引用節内のスタイルの３点について気づいた点を報告する。

１）使用引用標識

引用標識	１年生	２年生	３年生	修士１年	母語話者
無	5（26.3）	3（25.0）	--	2（15.4）	--
と	14（73.7）	8（66.7）	6（46.2）	2（15.4）	5（41.7）
って	--	1（8.3）	7（53.8）	9（69.2）	2（16.7）
っていう	--	--	--	--	2（16.7）
という	--	--	--	--	2（16.7）
みたい	--	--	--	--	1（8.3）

表２　調査結果：使用引用標識

学習者では「と」の使用が多く、学年が上がる（習得が進む）につれて、「って」の使用割合が増える。しかし、それ以外の引用標識は表出しない。また、日本語母語話者は学習者に比べ、引用標識のバリエーションが豊富であり、これは中村の行った調査結果に一致する。

２）ラベル名詞に関する誤用

学習者においても早い段階（学部１年生）から引用内容を抽象化して伝達している例が見られ、ラベル名詞による伝達が母語話者と学習者で量的に大きな差があったというわけではない。

(20) お父さんは一息子にーあー将来の夢を・・の夢のことを質問しました（学部１年）

(21) あ、お父さんはーあのー、娘の将来のゆめ、あーを聞いて、その娘がパパみたいな建築 家になりたいって言いました（修士１年）

しかしながら、学習者においては 「質問を聞く」といったラベル名詞の使用に関わる誤用が目立った。

(22) 娘は建築家にな、になりたいと言って、あーお父さんにもーあー質問を、を聞いてー（学部２年）

(23) 娘はお父さんに同じ質問を聞いてー、お父さんは、たぶん、ちょっとびっくりしました（学部３年）

フランス語でも対応する表現が存在するわけではなく、母語干渉による誤用とは考えにくい。学習者の類推による中間言語なのではないかと思われる。

３）引用節内のスタイル

１年生		２年生		３年生		修士１年		母語話者	
普	丁	普	丁	普	丁	普	丁	普	丁
4 (21.1)	15 (78.9)	5 (41.7)	7 (58.3)	9 (69.2)	4 (30.8)	10 (76.9)	3 (23.1)	12 (100.0)	--

表３　スタイル別使用引用節数（普：普通体、丁：丁寧体）

元の発話が親子間の普通体の会話であることから、母語話者は当然、全て普通体で再現しているのに対し、学習者は丁寧体でも再現している。 特に、習得の初期段階（学部１年）では丁寧体での表出の割合が明らかに高く、習得が進むにつれ、その割合いは徐々に減るものの、修士１年でもゼロにはならない。 元々聞き手に対する敬意が低い「普通体」である会話を「丁

寧体」に変えてしまうというのはやはり誤用であるとともに、コーパス分析の結果に見た基本的に普通体で再現する傾向とも逆行していると言える。 では、丁寧体引用節に何か特徴はあるのか。元の発話の発話機能を情報要求（質問）とそれ以外に分けて、引用節のスピーチスタイルを見てみた。

	１年生		２年生		３年生		修士１年		母語話者	
	普	丁	普	丁	普	丁	普	丁	普	丁
情報要求	1 (9.1)	10 (90.9)	--	5 (100.0)	2 (33.3)	4 (66.7)	3 (50.0)	3 (50.0)	2 (100.0)	--
その他	3 (37.5)	5 (62.5)	5 (71.4)	2 (28.6)	7 (100.0)	--	7 (100.0)	--	10 (100.0)	--

表４　発話機能別にみた引用節内使用スタイル数（普：普通体、丁：丁寧体）

すると、情報要求の発話を再現する場合は、１年生、２年生の段階ではほぼすべての発話が丁寧体で再現され（例２４、２５）、修士１年でも丁寧体引用節が顕著に維持され普通体での再現は限られる（例２６）。 一方、その他の発話を再現する場合は、丁寧体での再現が多いのは１年生のみであり（例２７）、２年生で普通体引用節の割合が高くなり、３年生以降は全ての発話が普通体で再現されている（例２８）。

(24) お父さんは一娘に一将来の夢は、あー何ですかと聞いて（２年生）

(25) えっとーパパは娘に、えとーその一娘の将来は何ですかって聞いて（３年生）

(26) お父さんがーえとー自分の娘に一将来は何になりたいかって聞くんだけど（修士１年）

(27) そして、とてもかっこいいですから、と言いました（１年生）

(28) 娘はーパパみたいに、えー建築家になりたいとー答えます（３年生）

では、なぜ元々普通体の会話が丁寧体で再現されてしまうのだろうか。これには、まず教科書の影響が考えられる。『みんなの日本語』では丁寧体をまず学習し、次に普通体を学習するため、学年が低いほど普通体よりも丁寧体に習熟しているといえる。 また、外国語環境における学習であり、教室で丁寧体のインプットを多く受け、教室外で日本語に触れる機会が限られていることも、普通体での発話の再現が習得初期の段階で困難である原因と考えられる。また、情報要求発話で丁寧体が維持されるのはなぜかという点については、疑問表現を引用節で再現する例が教科書中に提示されていないという理由がまず考えられる。 情報要求、いわゆる質問の発話の再現方法として、教科書『みんなの日本語』では疑問節での再現は提示されているものの、どのように「と節」で引用するかは明示的に示されていない。そのため、教室学習でも十分に扱われていないことが予想される。従い、明確にルールを学習していないことが、情報要求発話の再現で丁寧体が維持される一因なのではないかと考える。

では、 このような問題に対し、我々は具体的に何ができるのであろうか。 まず、今述べたように、教科書によっては情報要求の発話をどのように「と節」で引用するかが明確に提示されていないことから、教室学習において明示的に指導することが必要だろう。 また、「と

節」の学習を普通体練習の一つと捉え、機械的に「と節」内を普通体にすることで満足するのではなく、丁寧体で引用することが必ずしも誤用になってしまうわけではないことに言及した上で、丁寧体で再現された発話の敬意の対象は聞き手ではなく、元の発話の場の聞き手であるということを、学習者に気づき理解してもらうことが重要だと考える。そうすることで、元の発話の話者間の関係によっては、丁寧体での再現は待遇レベルが不適切になる可能性があることを明確に示す必要があると考える。

４．まとめと今後の展望

本発表では、2013 年に伊藤が行った調査の結果に関して、学習者は引用標識のバリエーションがほぼないこと、ラベル名詞に使用される語のコロケーションの問題、普通体の発話を丁寧体で再現してしまうといった引用節内のスタイルに関する誤った選択といった点を報告した。今後の展望としては、引用節内の「だ」の脱落、「と」引用節と共起する動詞のバリエーションが少ないといった非用の問題 の２点について簡単に見ていきたい。

記述的研究のなかで触れたように今回扱わなかった主観的要素の非主観化の一つとして名詞述語における「だ」の脱落があげられる。話し言葉で名詞述語の「だ」が脱落することはよく知られたとおりですが、規範文法においては間接話法においてこの「だ」は復元されなければならないとされている。しかしながら、コーパス分析をすると「だ」が表出されない例が数多く観察される。これらは、すべて、非主観化の行われていない直接話法的な現象ととらえなければならないのだろうか。

(29) あっちへ曲がれば　表参道 ∅　と言った

(30) 財政も　放漫 ∅　と言わざるをえない。

実は、「だ」の脱落には直接引用による「だ」の非表出以外にも、益岡（1987）で命名動詞、認識動詞と呼ばれる動詞の構文の影響も考えられる。というのは、認識動詞とともに「〜を〜と」と言った場合、「〜と」に引かれるのは陳述の力のない名詞であり、したがって当然「だ」もつかない。

(31) この仕事を　海外では　エステート∅　と　言う

これらの名詞句を「と」が取る構文と「と」引用節の境界は非常にあいまいで、判断の難しいケースも多い。このような問題も含めて、「だ」の脱落は、一概に誤用と言えない側面もあり、より詳細な理論的記述的研究が必要である。これまでに行った分析では、興味深いことに「言う」「考える」では「だ」の表出されない用例が多かったのに対し、「思う」では「だ」の表出が多かった。これらの分析は加藤（1997）が試みたような動詞の分類を進める上でも考慮すべき指標となるかもしれない。

また、これまで見てこなかった「と」引用節と共起する動詞のバリエーションの問題にも注目したい。中村（2014）では藤田（2000）で提案された分類にほぼ対応する引用節を含む構文の３分類を提案した。

それに基づきコーパス分析をおこなった結果ここに示したような使用分布が見られたことも

～というN	2 265				
発話・思考の再現	2 381	二重表現構造	2 031	～と言う	288
				～と思う／考える	587
				その他	1 156
		並列的構造	156		
		省略構造	194		

表５　引用助詞「と」の使用分布（中村 2014）

報告した。 この結果において共起する動詞のバリエーションに注目すると、６０％以上の文が「言う、思う、考える」以外の動詞が「と」引用節と共起していることがわかる。これに対し、学習者は「言う」「思う」以外の動詞と「と」引用節を用いることは極めて少数であると予想される。「と」引用節と共起する動詞のバリエーションが少ないといった非用の問題 について考え、より自然な日本語の習得への大きな一歩となるであろう広く自由に「と節」が使えるようになる力の獲得を目指す学習方法を模索したい。

参考文献

江口正（1998）「引用節・間接疑問節と内容名詞句の共起関係について」『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』30

藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』 和泉書院

鎌田修（1983）「日本語の間接話法」『言語』 12-9

鎌田修（2000）「日本語の引用」ひつじ書房

加藤理恵（1997）「「と」節を含む文について」『名古屋大学人文学研究』26

益岡隆志（1987）『命題の文法』 くろしお出版

益岡隆志，田窪行則（1992）『基礎日本語文法』 くろしお出版

森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院

仁田義男，他（2008）『現代日本語文法６　第１１部　複文』くろしお出版

砂川有里子（1989）「引用と話法」『講座日本語と日本語教育４　日本語の文法・文体』明治書院

砂川有里子（2003）「話法における主観表現」『朝倉日本語講座５：文法１』朝倉書店

寺村秀夫（国立国語研究所）（1981）『日本語の文法（下）』大蔵省印刷局

AUSTIN (1970) *Quand dire, c'est faire*. Éditions du Seuil, version française.

SEARL (1975) Taxonomy of illocutionary acts. *Language, Mind, and Knoxledge: Minnesota studies in the philosophy of science*. University of Minnesota Press.